

# 『排蘆小船』論

阿 満 誠 一

(一九九六年一月二四日受理)

一

本居宣長がやくから和歌に志していたことは、その「日記(寶歴二年迄之記)」(筑摩書房版『本居宣長全集』第十六卷 以下『全集』第何巻と記す)の寛延二年(宣長二十歳)の項に、

○同二年【己巳】從三月下旬、詠和歌受宗安寺【中ノ地藏立】法幢和尙之添削【自去去年志和詞、今年ヨリ專寄此道於心】

とあるのによつてうかがえるし、歌学にも心を染めていた事実は、「歌學ノートとも呼ぶべき」(『全集』第十四卷大久保正氏解題)『和歌の浦』の書き起こしが延享四年(宣長十八歳)であることから明白である。ただしそれらは、後年、宣長自身が伊勢在住時代のみずからの歌学びを振り返って、

おのれいときなかりしほどより、書をよむことをなむ、よろづよりも

おもしろく思ひて、よみける、さるははかしく師につきて、わざと學問すともあらず、何と心ざすこともなく、そのすぢと定めたるかたもなく、たゞからのやまとの、くさぐさのふみを、あるにまかせ、うるにまかせて、ふるきちかきをもいはず、何くれとよみけるほどに、十七八なりしほどより、歌よままほしく思ふ心いできて、よみはじめけるを、それはた師にしたがひて、まなべるにもあらず、人に見することなどせず、たゞひとりよみ出るばかりなりき、集どもも、古きちかきこれかれと見て、かたのごとく今の世のよみざまなりき、【玉かつま】二の巻「おのが物まなびの有しやう」【全集】第一巻)

と記すように、本格的・体系的なものではなかった。

とは言うものの、歌学びの願望にはなみなみならぬものがあつたらしく、在京時代まで書き継がれた『和歌の浦』は『全集』本でその分量が百ページを超えるし、その大部分が伊勢在住時代に書き継がれた(『全集』第二十卷大久保氏解題)とされる『経籍』には膨大な数の和漢の書の名が記されていて、伊勢の地にあつた宣長の、学問への憧憬がいかに切実であつたかが伝わって来る。

同じことは、今井田時代の彼の行跡にもうかがえる。

父定利とその前妻との間に生まれた義兄定治が家業をつぐことになつていたため、宣長は伊勢山田の紙商今井田氏の養子となる。寛延元年十九歳の時のことである。しかし『家のむかし物語』（『全集』第二十巻）に「寛延元年には、ある人の子になりて、山田にゆきて、二年あまり有しが、ねがふ心にはなほぬ事有しによりて、同三年、離縁してかへりぬ」と回想されるように、「書をよむことをなむ、よろづよりもおもしろく思」（『玉かつま』）っていた彼は商人としての修業には不向きだったように、間もなく同家を離縁になる。商人として身を立てることは彼の意識にはなく、その関心はもっぱら学問——とくに歌学——にあったことは、先の「日記（寶歴二年迄之記）」にも明らかであるし、『和歌の浦』はすでに十八歳の時に書き起こされている。

以上のように、和歌に興味を持ちながらも、おそらくその興味を十分に満たすことができなかった歌学が本格化するのには京都遊学時であろう。そこで宣長は堀景山のもとで学問に励み、景山を通して契沖の学問に接し、かつて『経籍』に名のみ記した和漢の諸々の書物を手にすることができた。また、同じ門下生との、互いを啓発するようなやりとりもあつたであろう。

『排蘆小船』はその成立時期について、京都遊学中のものとするか、遊学を終えて伊勢に帰ってからのものとするか、問題を残してはいるものの、内容的に、それが京都遊学の記念碑的産物である点では問題はあるまい。そこで展開される諸々の論はのちに整理・発展を経て『石上私淑言』が生まれるのであるが、『排蘆小船』は未完成であり未整理のままである。未整理であることは、たとえば『石上私淑言』が、「○ある人とひていはく」「問云」「○又とひていはく」「ある人またとひけらく」などで始まる問いに答える問答体で百二項目全てが構成されているのに対し

て、『排蘆小船』は、問いを設けることなく、はじめから自説を展開する形がかなり多く混入していることからわかる。また、終わりから二つ目の項目「六五」（以下『全集』に付された項目番号のみ記す）で「又問曰、定家卿ヲ師トセハ、ナンゾ二條家ノ説ヲハ用ヒズシテ、契沖ヲ用ルヤ、」との問いに答えたその終わり近くの部分で「冲師ノ説ノ趣ニ本ツキテ考ヘミル時ハ、歌ノ本意アキラカニシテ、意味ノフカキ處マテ、心ニ徹底スル也、コレ予心ニ明ラカニサトル事アリテ云ナリ、クハシキ事ハ別ニ、ソノ事ヲシルスヘシ」と書いたままで、ついに「クハシキ事」が書かれずじまいであつたことも、未完成であることの証左である。

本書では和歌が政治・道徳に関わらないことがまず主張され、和歌に政治・道徳とは別の価値を見い出そうとする注目すべき論が展開され、やがてそれはより精緻なものとなって『石上私淑言』に結実して行く。したがって、本書は他の諸々の論をも含めて『石上私淑言』との比較検討がなされなければならないのであるが、本稿では、その前段階として、『排蘆小船』に見られる和歌論の特徴について見ておきたい。未整理であるがゆえのわかりにくさが存在するものの、すでにいわゆる「もののはれ」論の片鱗がみられるし、なによりも本書においてすでにのちの古道論が芽を出している、というよりも、本書は歌論の形をとりながらも、その到達したところのものは畢竟古道論ではないかと判断されるからである。

## 二一

『排蘆小船』は次のような問答で始まる。

●問 歌ハ天下ノ政道ヲタスクル道也、イタツラニモテアソヒ物ト思フベカラズ、コノ故ニ古今ノ序ニ、コノ心ミエタリ、此義イカ、答曰、非也、歌ノ本體、政治ヲタスクルタメニモアラズ、身ヲオサムル為ニモアラズ、タ、心ニ思フ事ヲイフヨリ外ナシ、其内ニ政ノタスケトナル歌モアルベシ、身ノイマシメトナル歌モアルベシ、又國家ノ害トモナルベシ、身ノワサハイトモナルベシ、〔一〕

和歌を政治・道徳から切り離した論としてよく知られている箇所である。「タメニモアラズ」「為ニモアラズ」という言い回しは、目的という観点から「歌ノ本體」が検討されていることを示す。他方、「トナル」とは結果の観点に立っての言い回しである。言い換えれば、ここで宣長は「体」「用」の概念のもと和歌を論じており、政治・道徳から切り離すとは言ってもそれはあくまでも体（「歌ノ本體」）の側面においてであり、「用」としては「政ノタスケトナル歌モアル」ということになる。「此道、善惡教戒ヲ以テ旨トセス」（三〇）とも述べている宣長であるが、それは「歌ノ本體」は何に、どこに求められるのか。人は何の為に歌を詠むと云うのであるか。「政治ヲタスクルタメ」のものでなく「身ヲオサムル為」のものでない和歌とはそれでは何であるのか。

まず彼は、「歌ハ只思フ事ヲホトヨクイヒイツルマテ也」（四五）「歌ハオモフ事ヲ程ヨクイヒ出ル物也」（三三）「實情ニ文ヲナシテ云フガ歌也」（四八）と規定する。何を、どうした物であるかという形で和歌の規定が行われているのであるが、「何を」に相当する、「思フ事」「オモフ事」は、漢詩と和歌との相違を論じた中に（「女童ノ情ノヤウ」に）「ツタナクオロカナル情ヲ、トカクニ興アルサマニ、オモシロクツ、ケナスガ、今ノ歌ノ風雅也」（五二）とあることからその性格が明らかであ

る。「ツタナクオロカナル」が「サカシク男ヲシキ」に對立するものとして提示されていることも、その性格を明示しているだろう。ここに現われる「オモフ事」は詠歌という営みが想定されていない段階でのそれであるが、詠歌との関わりのもとでとらえられる「實情」になると事情はやや複雑になる。

（歌というものは）思フ心ヲヨミアラハスガ本然也、ソノ歌ノヨキヤウニトスルモ、又歌ヨム人ノ實情也、ヨキガ中ニモヨキヲエラビ、スケタルガ中ニモスケタル歌ヲヨミイテムトスルガ、歌ノ最極無上ノ所也、歌ノヨシアシヲイハヌ時ハ、論スル事モナクマナフ事モイラヌ也、ヨキ歌ヲヨマムト思フ心ヨリ、詞ヲエラヒ意ヲマフケテカザルユヘニ、實ヲウシナフ事アル也、ツネノ言語サヘ思フトアリノマ、ニハイハヌモノ也、況ヤ歌ハホトヨクヘウシオモシロクヨマムトスルユヘ、我實ノ心トタカフ事ハアルベキ也、ソノタガフ所モスナハチ實情也、其故ハ、心ニハ惡心アレトモ、善心ノ歌ヲヨマムト思フテ、ヨム歌ハイツハリナレトモ、ソノ善心ヲヨマムト思フ心ニ、イツハリハナキ也、スナハチ實情也、タトヘハ花ヲミテ、サノミオモシロカラネト、歌ノナラヒナレハ、随分面白ク思フヤウニヨム、面白ト云ハ、偽リナレド、面白キヤウニヨマムト思フ心ハ實情也、シカレハ歌ト云フモノハ、ミナ實情ヨリ出ル也、ヨクヨマムトスルモ實情也、ヨクヨマムトオモヘト、ヨクヨメバ實情ヲウシナフトテ、ワルケレトアリノマ、ニヨム、コレ、ヨクヨマムト思フ心ニタカフテ偽也、サレトモ、實情ヲウシナフ故ニ、アリノマ、ニヨマムト思フモ、又實情也、（二二）

ここで言う「實情」の意味するところは必ずしも一樣ではない。一つ

には「イツハリ」「偽」の対立概念としての「實情」の存在が指摘できる。それは「實」「實ノ心」と表現されているものと同一のものであって、たとえば美しくない花を見て美しくないと感じるといった、いわば対象に触発されて心中に生ずるあるがままの感情であり、又、対象のあるがままの姿でもある。かつ、人間の意志が関わっていない段階の感情である。

いま一つは第二段階の「實情」とも言うべきもので、詠歌に際しての人間の偽らざる願望・意志としての「實情」であり、「善心ヲヨマムト思フ心」「ヨクヨマムト思フ心」とあるのがまさしくそれである。そして、「ヨクヨマムトスルモ實情也」と言うとき、第一段階において「イツハリ」であったものは「實情」に転化するのである。

「何を」に続く、「どのように」に関して示された、「ホトヨクイヒイツル」「程ヨクイヒ出ル」とは「ヨクヨマムトスル」とことと密接な関係を持つてであろうことは想像に難くないが、この点に関してはより具体的に次のように述べられる。

●ヨキ歌ヲヨマムトオモハバ、第一ニ詞ヲエラヒ、優美ノ辭ヲ以テ、ウルハシクツ、ケナスベシ、コレ詠歌ノ第一義也、ソノユヘハ、和歌ハ言辭ノ道也、心ニオモフ事ヲ、ホドヨクイヒツヅクル道也、心ニオモフ事ヲ、アリノマ、ニオモフトホリニイヘバ、歌ヲナサズ、歌ヲナストイヘトモ、トルニタラヌアシキ歌也、サレハズイフン辭ヲト、ノフヘキ也（〔三六六〕）

「和歌ハ言辭ノ道也」という確固たる認識があるからであろうが、ここでは詠歌に際して用いることが優美なそれであるべきこと、かつ、続けながらも「ウルハシク」あるべきことが述べられる。「ホトヨク」とはそ

ういうことなのである。これは用いる歌語の限定がなされたと言っているのであるが、「ツタナクヲロカナル情」にふさわしいのはなるほど「優美ノ辭」であろうと納得せざるをえない。

## 三

「ツタナクオロカナル情」を「優美ノ辭」でもって「ホドヨクイヒツヅクル」詠歌に際しては三代集を手本とすべきであることが随所で説かれる。曰く、

マコトニ歌ハ古今三代集ニ過ル事ハナキ也、歌學ノタメニハ萬葉第一ナレト、詠歌ノタツキニハ三代集ニハ及ハヌ也（〔二七〕）  
今ノ詠歌ハトカク古今三代集ヲ第一根本ノ法度トシテ（〔一九〕）  
最初ハタ、古今三代集ハカリヲヨクノミテ（〔二二〕）

古今伝授について、あるいは和歌の変遷について、さらには堂上・地下、契沖といったさまざまな話題を載せた『排蘆小船』において、三代集に関する記述はその出現する回数が圧倒的に多い。これはその原因を『排蘆小船』が未整理であるところに求めるのではなく、同書で宣長が力を入れて主張しなかったがためであると理解すべきであろう。彼がかくまで三代集を推奨する理由は、「ヒロク此道ノ興廢ヲ論ゼハ」（〔五九〕）として和歌の変遷を説いた部分（「歴代變化」という見出しが付されている）に詳しいが、いまそれを整理すれば次の如くである。

『古事記』『日本書紀』に載せられている歌には「巧ミテヨマムトスル」意識が見受けられない。『萬葉集』に至って、ありのままの感情を詠んだ

歌と「タクミヲ本トスル」歌とが半々になり、やがて歌道の盛りを迎えて「勅撰ト云事ハシマリテ」人々が競いあつて優れた歌を詠むようになる。そこで第一番目の勅撰集として『古今集』が編まれたが、「ハシメテ撰集セラレタル古今集ナルユヘニ」詠歌の手本とすべきである。『後撰集』は『古今集』ほどではないが「ナヲ歌サマヨク、清撰ノ集ナレハ、同シク取り用ル也」。『拾遺集』は歌の「選ヒヤウ」がよくないが「時代ハナヲヨクシテ、歌サマヨケレハ」「後世マテ歌道ノ眼ニスル事也」。そして「コトニ古今後撰ハ、歌道ノサカンナル世ニアタリテ、天下ノ名人タル人ノアツマリテ、公ケ事ニテアツメラレタレハ、尤用ユヘキ集也」。

『後拾遺集』『金葉集』『詞花集』は一括して「風體ヨロシカラズ」としてしりぞけられる。詞を大事にせず、その結果「實ノミニシテ花ナキモノ也」というのである。「和歌ハ言辭ノ道也」と言い、「歌ノヨシアシハ多ハ詞ニアリテ、情ニアラズ」という宣長には当然の判断であつたろう。『千載集』は中興期のものとして推奨され、『新古今』に至っては「此道ノ至極セル處ニテ、此上ナシ」と絶賛される。

こうして見てくると三代集を詠歌の手本として勧める先の引用部分と『新古今』礼賛の言葉とは矛盾するかのとき観があるが、彼は、「歌ノ風體ノ全備シタル」「新古今」に少しでも似た歌を詠もうと思えば「三代集ヲズイブン學ブ」べきだと主張する。「新古今時代ノ名人、イツレモミナ三代集ヲ手本ニシテ」詠んだのであるし、定家の教えに「三代集ヲ手本ニセヨ」とあるからだというのがその根拠である。

それでは三代集を手本にして「オモフ事ヲ程ヨクイヒ出」ることの意義はどこにあるというのか。

サレハ此歌ノ徳、只性情ヲノヘテ思ヒヲハラスノミナラス、古昔ノ風

雅ニ化シテ、古人ノ心ニナリ、古人ノ詠吟ヲナスコト、何ヨリノ勝事ナラズヤ（〔四一〕）

イツハリカサリテナリトモ、随分古ノ歌ヲマナビ、古ノ人ノ詠シタル歌ノ如クニヨママノト心ガクレハ、ソノ中ニヲノヅカラ、平生見聞スル古歌古書ニ心ガ化セラレテ、古人ノヤウナル情態ニモウツリ化スルモノ也、（中略）コレ和歌ノ功德ニヨリテ、我性情ヲモヨク化スルト云モノ也（〔四二〕）

『排蘆小船』では「歌ノ徳」としてさまざまものが提示される。曰く「心ヲシヅメテ妄念ヲヤムル」（〔三七〕）「性情ヲノヘテ思ヒヲハラス」（〔四一〕）「心バセヨヤハラクル」（〔三二〕）等々。しかし、ここではそれらにまさる「徳」とあるというのである。「何ヨリノ勝事ナラズヤ」とはそういうことである。ここでいわば最上の「徳」として価値が付与されているのは、古人の感情との一体化・同化ということである。それは古人が詠んだのと同じような歌を詠む目的のために意義の認められるものであるが、「古人ノヤウナル情態」に自らが変わるることそのこと自体にも意義が認められている。このような認識が生まれる根底には時代に対する、人間そして言語に対する次のような悲観的・危機的認識が横たわっている。

世ダンノ末ニナリ、後世ニナルホド、人ノ心イツハリ多ク、思フ事ヲアリノママニモイハヌ、ツクロヒカサルヤウニナリユク（中略）今ハ人ノ心イツハリカサル事多ケレハ、（〔四二〕）  
ムカシノ人ハ、正直質朴ニシテ、イツハリカザル事ノスクナカリシ事シルヘシ（〔三三〕）

マヅムカシハ、ツネノ言語モ古雅ニシテ、(中略)シカルニ世ノウツ  
 リカハルニシタカフテ、ツネノ言語ハナハダカハリ、キタナクナリユ  
 キ (〔三六〕)

マヅ古ハ詞モ情モスナホニヤサシク雅ナリ、後世ニイタルホド、詞モ  
 情モキタナクナリモテユク也 (〔四一〕)

〔四二〕〔三三〕からの引用はおそらく儒教の影響を念頭に置いたものであろう。儒教が渡来する以前の「ムカシノ人」が実際に「正直質朴」であったかどうかはいま問題ではない。押さえておくべきことは、宣長における「ムカシノ人」がそういう人として把握されているということである。「正直質朴」な人々が生きていた理想的な時代として「ムカシ」がとらえられていると言ってもよい。

「情モキタナクナリモテユク也」といわれる時の「キタナク」は道徳的な意味で用いられているのでないことは言うまでもない。〔三六〕の内容とあわせ考える時それは「雅」の反対概念として用いられていることは明白である。ここでも「古」のことが肯定的にとらえられ「後世」「今」は否定的に把握されることになる。こういう時代認識、人間認識そして言語認識と、「何ヨリノ勝事ナラズヤ」として示される「歌ノ徳」すなわち「古昔ノ風雅ニ化シテ、古人ノ心ニ」なるという主張をつなげて考えると、そこに見いだされるものは、宣長の目に好ましい時代として映じたいにしえに回帰するための手段としての歌の姿である。雅びやかな言語を用い、「正直質朴ニシテ、イツハリカザル事ノスクナ」い人間に戻るための方便としての和歌である。ここまで来た時、われわれは彼の歌論が一種の道徳論の側面を有することに気付かされるのである。